Nara Women's University

【内容の要旨及び審査の結果の要旨】『椿説弓張月』論

メタデータ	言語:
	出版者:
	公開日: 2010-07-13
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 久岡,明穂, 井口,洋, 弦巻,克二, 大谷,俊太, 松尾,良樹
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/10935/1682

氏名（本籍）	久岡明穂　（京都府）
学位の種類	博士（文学）
学位記番号	博課第287号
学位授与年月日	平成18年3月24日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 人間文化研究科
論文題目	『椿説弓張月』論
論文審査委員	（委員長）教授　井口　洋　教授　弦巻克二 教授　大谷俊太　教授　松尾良樹

論文内容の要旨

滝沢馬琴の史伝物読本『椿説弓張月』（以下『弓張月』という）は、保元の乱で崇徳院方に属し、敗れて伊豆大嶋に流された武将源為朝が、実は生きて琉球に渡り、その地で活躍したという物語で、前半が日本の保元の乱、後半は琉球国の争乱が舞台となっている。そのためか、従来は一つの作品としての統一的な主題を見出だしにくいとされてきたが、最近の研究は、『弓張月』では日本・琉球ともに王位継承が問題となっているところに注目して、そこでの王位をめぐる争乱に主題を認めるようになってきている。けれども、ということは、保元の乱の「骨肉の争い」への批判に主題を認めることでしかなく、その解釈はそれだけでは、保元の乱後為朝が伊豆大嶋に流され、そこからさらに琉球国に渡ることや、為朝の子舜天丸が琉球王になることなどを含み込む統一性に欠けている。したがって、『弓張月』における前半日本国と後半琉球国とに通ずる統一的な主題は、なお検討されなければならない。

本論文は、「はじめに」で、以上のように研究史を整理し、改めて課題を設定したのち、第一章「福禄寿仙の異名」において、『弓張月』の大団円で、「福禄寿仙」が現れ、日本では「海神」、琉球では「君真物」「阿麻美久」などと呼ばれているのは全て自分の異名である、と語ることに着目した。これは第一に、琉球を『日本書紀』に記される「海神」の宮に比定し、日本と琉球とが神話時代から婚姻を結ぶ関係の国家であったとし、さらに第二に、『日本書紀』で彦火火出見尊が捜し物のために「海神」の国へ渡るところを、『弓張月』では為朝がその地で、『書紀』の「豊玉姫」たる「海神の娘」の「君々」と出会うことにして、日本琉球両国家の関係を為朝によってつないだ、いずれも馬琴の構

想であったと、論者はいう。

第二章「『椿説弓張月』の方法」では、『弓張月』における為朝の伊豆大嶋脱出の場面に着目して、馬琴の史伝物読本としての考証の意義を検討した。まず典拠と作品とを詳細に比較検討し、典拠『参考保元物語』では、伊豆大嶋で最期を迎えた為朝を、馬琴がいかにして琉球へ渡らせたかを検討した。すなわち、馬琴は考証の結果、『保元物語』では、「勅勘ノ身」なれば「終ニ本意ヲ遂ス」に終わったとされる為朝に、伊豆大嶋では死なず、「遂」げられなかった「本意」をさらに追求させることができる、いわば間隙を見出だし、〈焼首〉と〈身代り〉という趣向によって、それを実現させたというのである。

第二章「『椿説弓張月』の方法」は、為朝の伊豆大嶋脱出の場面に着目して、為朝が大嶋で終わる史実と違う虚構を作るにあたっても、あくまでも史実を詳細に考証した上で見出だした、いわば間隙に可能性を実現させる馬琴の創作方法の「ダイナミズム」を論証する。

第三章「保元の乱前後における為朝」は、保元の乱前後における為朝の行動について、都ですでに典拠『参考保元物語』の驕慢傍若無人ぶりを脱したとする先行説を批判し、それは九州に流されてからもなお肥大し、さらに流された伊豆大島でさえ、いわれるような「理想の武士」とは認められないありようであったことを論証している。

第四章「舜天丸と琉球王位」、第五章「寧王女と琉球王位」では、為朝と白縫の子舜天丸が琉球の王位を継承することになる『弓張月』後半を検討する。すなわち、前者では舜天丸の母の白縫と琉球國の王の血統たる寧王女との間に起こる〈合体〉ということについて、後者では、琉球「伝国の璽」である「虬の珠」と寧王女との関係について、この二つのことを通じて、馬琴が一般に王位とその正統および継承ということの意義を歴史的に定位する意図があったことを読み取っている。

第六章「結びにかえて」は、『弓張月』をあらためて為朝の一代記としてふりかえると、もともと、どこまでも傍若無人、驕慢のかぎりであった為朝が、大嶋脱出を境として、勅勘の身として官軍の追討を受けたゆえんに思いいたり、ゆえに琉球国ではどこまでも〈武将〉として、寧王女の王位継承に貢献するという、〈成長〉の物語であったと結論する。

論文審査の結果の要旨

滝沢馬琴の史伝物読本『椿説弓張月』（以下『弓張月』という）は、保元の乱で崇徳院方に属し、敗れて伊豆大嶋に流された武将源為朝が、実は生きて琉球に渡り、その地で活躍したという物語で、前半が日本の保元の乱、後半は琉球国の争乱が舞台となっている。そのためか、従来は一つの作品としての統一的な主題を見出だしにくいとされてきたが、最近の研究は、『弓張月』では日本・琉球ともに王位継承が問題となっているところに注目して、そこでの王位をめぐる争乱に主題を認めるようになってきている。けれども、ということは、保元の乱の「骨肉の争い」への批判に主題を認めることでしかなく、その解釈はそれだけでは、保元の乱後為朝が伊豆大嶋に流され、そこからさらに琉球国に渡ることや、為朝の子舜天丸が琉球王になることなどを含み込む統一性に欠けている。したがって、『弓張月』における前半日本国と後半琉球国とに通ずる統一的な主題は、あらためて検討されなければならない。

本論文は、「はじめに」で、以上のように研究史を整理し、改めて課題を設定したのち、第一章「福禄寿仙の異名」において、『弓張月』の大団円で、「福禄寿仙」が現れ、日本では「海神」、琉球では「君真物」「阿麻美久」などと呼ばれているのは全て自分の異名である、と語ることに着目した。これは第一に、琉球を『日本書紀』に記される「海神」の宮に比定し、日本と琉球とが神話時代から婚姻を結ぶ関係の国家であったとし、さらに第二に、『日本書紀』で彦火火出見尊が捜し物のために「海神」の国へ渡るところを、『弓張月』では為朝がその地で、『書紀』の「豊玉姫」たる「海神の娘」の「君々」と出会うことにして、日本琉球両国家の関係を為朝によってつないだ、いずれも馬琴の構想であったと、論者はいう。

この論文は『弓張月』を論ずるに際し、この長大な作品の末尾の記述から、作者馬琴の構想した〈世界〉をもつことを見定めたもので、その方法は学会時評でも注目されたものである（『国文学』平成15年９月）。

第二章「『椿説弓張月』の方法」は、為朝の伊豆大嶋脱出の場面に着目して、為朝が流罪地大嶋で死ぬ史実とは違う虚構を作るにあたっても、あくまでも史実を詳細に考証した上で見出だした、いわば間隙に可能性を実現させる、馬琴の創作方法の「ダイナミズム」を論証する。

この論文は、日本近世文学会で研究発表ののち、学会の機関誌『近世文藝』に掲載され、ふたたび学会時評において、「稗史を史実の作りかえではなく、歴史の空白を埋める行為と見なす骨太な文学観には可能性を感じる」と評された（平成17年12月）。

第三章「保元の乱前後における為朝」は、保元の乱前後における為朝の行動について、都ですでに

典拠『参考保元物語』の驕慢傍若無人ぶりを脱したとする先行説を批判し、それは九州に流されてからもなお肥大し、さらに流された伊豆大島でさえ、いわれるような「理想の武士」とは認められないありようであったことを論証している。

この論文は、通説先行説になじまず果敢に取り組み、『弓張月』の解読に新しい回路を提示した点で注目に値する。

第四章「舜天丸と琉球王位」、第五章「寧王女と琉球王位」では、為朝と白縫の子舜天丸が琉球の王位を継承することになる『弓張月』後半を検討する。すなわち、前者では舜天丸の母の白縫と琉球國の王の血統たる寧王女との間に起こる〈合体〉ということについて、後者では、琉球「伝国の璽」である「虬の珠」と寧王女との関係について、この二つのことを通じて、馬琴が一般に王位とその正統および継承ということの意義を歴史的に定位する意図があったことを読み取っている。

『弓張月』後半が琉球国の国家的争乱の物語であることは従来も考えられてきたが、それが単に王位をめぐる善悪の対立を描くスペクタクルでなく、王と王位継承者の国家国民に対する自覚をめぐる主題を内包することを分析したのは、この論文がはじめて成し遂げたものであると評価できる。

第六章「結びにかえて」は、『弓張月』をあらためて為朝の一代記としてふりかえると、もともと、どこまでも傍若無人、驕慢のかぎりであった為朝が、大嶋脱出を境として、勅勘の身として官軍の追討を受けたゆえんに思いいたり、ゆえに琉球国ではどこまでも〈武将〉として、寧王女から舜天丸への王位継承に貢献するという、〈成長〉の物語であったと結論する。

すなわち、『弓張月』全編を貫いて、国家的規模の主題を支える為朝は、最初から文武両道を兼備した豪傑であったのではなくて、物語の進行とともに〈成長〉する〈英雄〉であった、と論者はいう。これはあきらかに、滝沢馬琴『椿説弓張月』の読解に新機軸を導入したものと認められる。それらの主張をより鮮明に打ち出すべくつとめるとともに、その過程で掘り出された問題をさらに個々に展開して、馬琴読本の研究の一翼を担うことが、今後の論者に期待されるゆえんである。

以上の諸点から、本論文は奈良女子大学博士（文学）の学位を授与されるに十分な内容を備えているものと判断する。